

-Index-

連載企画「セルフアドボカシースキルを育てる」①
R8年度本校研修案内
ツナガル・ブック改定
チャレンジ！発音指導⑩



「セルフアドボカシースキルを育てる」①

近年、聴覚障がい教育では、『セルフアドボカシー』という言葉が注目されています。セルフアドボカシーとは、自分のニーズや権利を理解し、周囲に適切に伝える力のことです。インクルーシブ教育の推進や障害者権利条約の理念、合理的配慮の制度化など、社会全体で障がいのある人の主体性を尊重する流れが強まる中、きこえない・きこえにくい人たちが自分の困りごとを説明し、必要な支援を求める力は、学習や社会参加に不可欠なスキルとなっています

本号では、セルフアドボカシーとはなにか、セルフアドボカシーが注目されるに至った経緯をまとめていきたいと思います。

セルフアドボカシーとは??

セルフアドボカシーは、単に自己主張することではありません。自分の状況や必要な配慮を理解し、相手に分かりやすく伝える力を指します。聴覚障がいの場合、外見からは分かりにくく、周囲から気づかれないことが多くあるため、本人が『こうしてほしい』と伝えることが重要です。

例えば、座席の位置、補聴機器やFMシステムの使用、話し方の工夫など、学習環境を整えるための具体的な要望を自分で説明できることが求められます。



なぜセルフアドボカシースキルが注目されているのか

セルフアドボカシーが注目されるようになった背景には、いくつかの社会的・教育的な要因がありました。まず、インクルーシブ教育の進展です。地域の学校で学ぶきこえにくい児童生徒が増える中、教員や同級生が必ずしも聴覚障がいに初めから詳しく、理解があるわけではありません。そのため、**本人が自分のニーズを他者に伝える力が学習の質はもとより、学校生活を左右します。**

第二に、2006年に国連で障害者権利条約（2008年発効）が採択され、それを受けて、日本でも障害者差別解消法が2016年に施行されました。こういった背景から、合理的配慮を求める

権利が制度的に保障され、その合理的配慮を受けるため、**自分の状況や必要な支援を周囲に分かりやすく伝えることが重要になってきました。**

第三に、自分の人生を主体的に選び取る力（エンパワーメント）と、将来を見据えたキャリア教育の重要性です。**学校生活だけでなく、進学や就職の場面でも、どんな支援が必要かを自分で説明し、周囲に協力を求める力が求められています。**

さらに、字幕や音声認識などの技術進化により、さまざまな支援機器が登場したことで、選択肢が広がり、支援方法も1つではなく、本人が自分にあった方法を選び、周囲に説明する力が必要になったことも影響しています。

参考文献 外務省「障害者の権利に関する条約」

- ・ 内閣府「障害者差別解消法」
- ・ 木村淳子ら（2020）「学童期聴覚障害児におけるセルフアドボカシーの評価と検証」



次号以降は、実際にどのようにして、学校生活や自立活動の中で、このセルフアドボカシースキルを育てていくのかということを文献などから紐解きながら一緒に考えていきたいと思います。

本校 HP に R8 年度研修案内掲載

本校では、聴覚に障がいのある幼児・児童・生徒を担当される担任の先生方および養護教諭の先生方を対象に、毎年、研修会を実施しています。

R8年度は、より実践的で参加しやすい内容となるよう、**研修の構成を刷新し、年間を通したプログラムとして整理いたしました。**

春の研修会では、本校のHPのリンクからGoogleフォームにアクセスいただき、必要事項をご入力いただくことで、**YouTubeの限定公開動画をご覧いただけます。**動画では、新学期に聴覚障がいのある子どもを担当される際に、まず押さえておきたい基礎的なポイントをまとめています。**音声のないスライドショー形式となっております、いつでも、何度でも繰り返し視聴できます。**今後、各教科の授業での留意点なども盛り込みアップデートしていく予定です。

また、夏休みには、全体講演および複数の分科会（発音指導、補聴器や人工内耳、補聴援助システムについて、養護教諭向けの聴力検査の方法 など）、交流会を予定しています。

さらに冬休みには、聴覚障がい教育に携わる教員の体験談や、聴覚障がい教育全般に関わる内容を扱う2つの講座の研修会を企画しています。

各研修の詳しい日程や内容については、決定次第、随時HPでお知らせいたします。

R8年度の研修が、先生方の日々の実践の一助となるよう準備を進めております。たくさんの先生方の参加をお待ちしております。



本校HPの研修会案内ページは、右のQRコードからご確認ください。

チャレンジ！発音指導 28

撥音

今日は、撥音（はつおん）である「ん」についてお話していきます。
「ん」は、日本語の中でも特に見えにくく、聞き取りにくい音のひとつです。聴覚障がいのある子どもたちにとっては、音の存在そのものが曖昧になりやすく、発音指導では感覚的な理解とタイミングの習得が重要になります。

「ん」の構造的特徴

「ん」は、口の中ではなく鼻に息を通して出す鼻音です。ただ、ひとくりに「ん」としても細かく分けると、次のものがあります。

- 口蓋鼻音 (ŋ) : 「かんがえる」「せんごく」など、舌の奥が上あごに近づく音
- 歯茎鼻音 (n) : 「せんせい」「ほんとう」など、舌先が歯茎に触れる音
- 両唇鼻音 (m) : 「しんぶん」「こんま」など、唇を閉じて出す音

このように、「ん」は後続の音によって構音位置が変化するという特徴があります。**つまり、「ん」は単独で教えるのではなく、前後の音との関係の中で教える必要がある音です。**

練習の工夫

- 鼻音の感覚をつかむ
 - 鼻に指を当てる：発音時に鼻に指を当てて、振動を感じることで「鼻から音が出ている」ことを体感できるようにします。
 - 鼻をつまんで発音：鼻を軽くつまんで「ん」を発音すると、音が出にくくなることを確認し、鼻音であることを理解できるようにします。
- 音のつながりで練習する
 - 語頭・語中・語尾の違いを意識：「ん」は語頭には現れず、語中・語尾で現れるため、位置による発音の違いを練習します。
例：「ほん」「かんがえる」「しんぶん」
 - 後続音による変化を体感：「ん」の後に来る音によって舌や唇の動きが変わることを、鏡や口腔図で確認します。
- 視覚と触覚の支援
鏡を使って口の動きを確認：唇が閉じるか、舌がどこに触れているかを見える化します。
手や指で動きを感じる：鼻の振動、唇の閉じ方、等を手で感じることで、音の出し方を身体で覚えます。

指導のポイント

「ん」は、音としては短く、聞こえにくいいため、「音がある」ことを意識させる支援が重要です。聞こえにくい子にとっては、音の存在を感じる事が難しいことがあるため、視覚・触覚・運動感覚を組み合わせた指導が効果的です。

また、「ん」が抜けてしまう、または「ん」の代わりに別の音が入ってしまう場合は、音のタイミングや構音位置の誤りが原因であることが多いため、個別に確認しながら調整していく必要があります。

ツナガル・ブック®改定！

NTT テクノクロス株式会社は、聴覚障がいのある社員との円滑なコミュニケーションを促進するために作成したガイドブック「ツナガル・ブック®」の改訂版を公開しました。同社ではダイバーシティ&インクルージョンを重要な経営戦略として位置づけており、今回の改訂は、利用者から寄せられた多様な声を反映した内容となっています。

「ツナガル・ブック®」は、2023年5月に一般公開された資料で、公開後は2,500件を超えるダウンロードがありました。「職場での説明がスムーズになった」「障がい者雇用の受け入れ時にも役立つ」など、企業・団体から高く評価されています。

一方で、「イラストを増やしてほしい」「実際の活用例を知りたい」といった要望も多く寄せられたことから、今回の改訂では「あるある」の場面をイラストで示すページや、企業での具体的な活用事例が追加され、実践的で活用しやすい内容になっています。

教育現場においても、教職員の研修や実際の支援の際に活用できる内容もあり、より理解を深めやすい資料となっています。

ぜひ、一度ご覧ください。

<https://www.ntt-tx.co.jp/corporate/diversity/pdf/TunagaruBook.pdf>

「みみネット」編集部：

大阪府立中央聴覚支援学校 聴覚支援センター 担当：金森、只腰、萩原
〒540-0005 大阪市中央区上町1-19-31
TEL: 06-7712-1405 (支援関係) / 06-6761-1419 (学校代表)
FAX: 06-6762-1800



